

参考資料

展開計画

1

アマゾンやセラードの開発について①～⑤のカードをグループ内で分担して読み、ウェビングで整理してみよう。

活動前に以下のカード1（オレンジ色）を用いて、教員からアマゾンとセラードの概要について紹介する。活動後は以下のカード2（オレンジ色）を用いて、セラードにおける大豆栽培に JICA が関わっていたことを補足する。

1 拡大する大豆栽培

●「拡大する大豆栽培 影響と解決策」

1. 増え続ける大豆
2. 大豆と森林減少 アマゾン セラード



※ P.4 で大豆には多様な用途があることが確認できる。P.19 の地図でアマゾンとセラードの位置、P.29 でアマゾンの森林減少の様子、P.33 でセラードの森林減少の様子、P.30 でセラードには世界最大の湿地であるパンタナール湿原があることを紹介する。

WWF（世界自然保護基金）より

2 大豆栽培とセラードの開発

●「日伯セラード農業開発協力事業が食料安全保障に果たした役割と展望」

3. セラード農業開発のインパクト：「不毛の地」を四半世紀で世界の穀倉地帯へ
4. ODA 史上最大のプログラム：日伯セラード農業開発協力事業の概要
5. 穀物増産能力 7 億トン：セラード地帯の潜在力試算
6. 開発の連鎖：セラード農業の課題と展望



国際協力機構（JICA）常勤嘱託 本郷 豊「日伯セラード農業開発協力事業が食料安全保障に果たした役割と展望」より

① アマゾンの破壊の現状

●アマゾンの破壊の現状

- 01 道路の建設から始まった森の破壊
- 02 大豆栽培がアマゾン破壊を加速
- 03 もとの面積の 15%が既に消失



特定非営利活動法人 熱帯森林保護団体（RFJ）より

② 森林火災と干ばつの増加

●世界最大の湿地帯が干上がった ブラジルで今、起きている異変の正体

- 干からびたワニ
- 気候変動にもつながる危機
- 広がる農地、輸出用の大豆畑に
- 森林壊して作られる「排出ゼロ」燃料



●アマゾンの熱帯雨林に迫る「限界点」 温暖化が抑制できなくなる前にやるべきこと



The Asahi Shimbun GLOBE + より

③ 舗装道路の開通

●牛肉と大豆、アマゾン森林火災に関わるブラジルの2大産業

AFP BB News より



●アマゾン熱帯雨林、幹線道路がもたらす開発と破壊 ブラジル

AFP BB News より



●焦点：アマゾン奥地で道路再建、住民の夢か熱帯雨林の枯死か

ライターより



④ 先住民族の権利

●アマゾンの先住民族

- 01 自然と共生してきた先住民族の歴史
 - 02 多様な文化を生きる先住民族
 - 03 ブラジル憲法が保障する先住民族の権利
 - 04 “アマゾンの森の守り人”として
- 特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体 (RFJ) より



●環境より開発優先のブラジル政府 アマゾンの長老の苦悩 「人々は見ないふりしている」

The Asahi Shimbun GLOBE + より



⑤ 生物多様性

●大豆と「世界で最も生物多様性に富むサバンナ」ブラジル セラードの深い関係

- 世界中の食を支える「隠れた作物」大豆
- 一大農業地帯となったセラード
- セラード特有の自然
- WWF（世界自然保護基金）の取り組み



WWF ジャパン（世界自然保護基金）より

参考資料

展開計画

2

森をつくる農業に挑む日系ブラジル人の動画をみてみよう。



JICA-Net ライブラリー 【農業・農村開発】

アグロフォレストリー 森をつくる農業 ～アマゾン熱帯林との共存～ (ダイジェスト版) (6:08)

展開計画

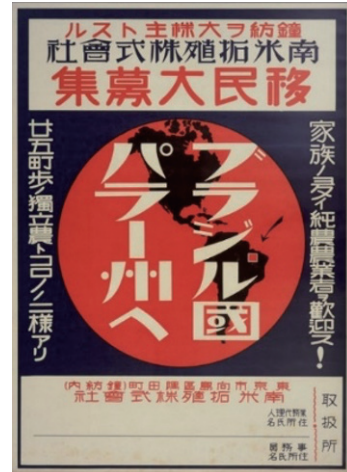
2

トメアスーの農業のできごとカードを並べてみよう。

① 移民募集のポスターに書かれていること読み取ってみよう。

② 1928年(昭和3年)政府が主導し、鐘紡が主に資金を出して南米拓殖会社を設立する。この会社が、日本で、ブラジル パラー州への移民を募集した。A～Hのカードには、パラー州アカラ(のちにトメアスーと改称)で農民が経験したことが書かれている。これを年代の古いものから順に並び変えて、トメアスーの農業のあゆみを見てみよう。

カード並び替えの答え B → C → A → D → E → F → H → G



カード

A 期待したカカオ栽培にも失敗し、南米拓殖会社は植民地経営から撤退した。そこで、アカラ野菜組合を元にしたアカラ産業組合が植民地経営の中心となった。

B 第1回の移民募集では、43家族、単身者9人の計189人が入植。カカオを主な作物にするが、カカオの収穫まで4年かかるので、野菜の収穫を始める。

C アカラ野菜組合を結成し共同で出荷した。しかし、生活は苦しく最初の3年間に入植した202家族のうち、61家族が植民地を去った。

D 戦争のために日本とブラジルの国交が断絶。アカラ産業組合の資産はブラジルに接収された。アカラ植民地は、日本人やドイツ人など枢軸国の人の抑留地となる。

E アカラ植民地からトメアスー植民地に改称。戦前にシンガポールから導入されたこしょう栽培が急速に普及した。こしょうの国際相場が高騰し「黒いダイヤ」と呼ばれ、「こしょう長者」も生まれた。

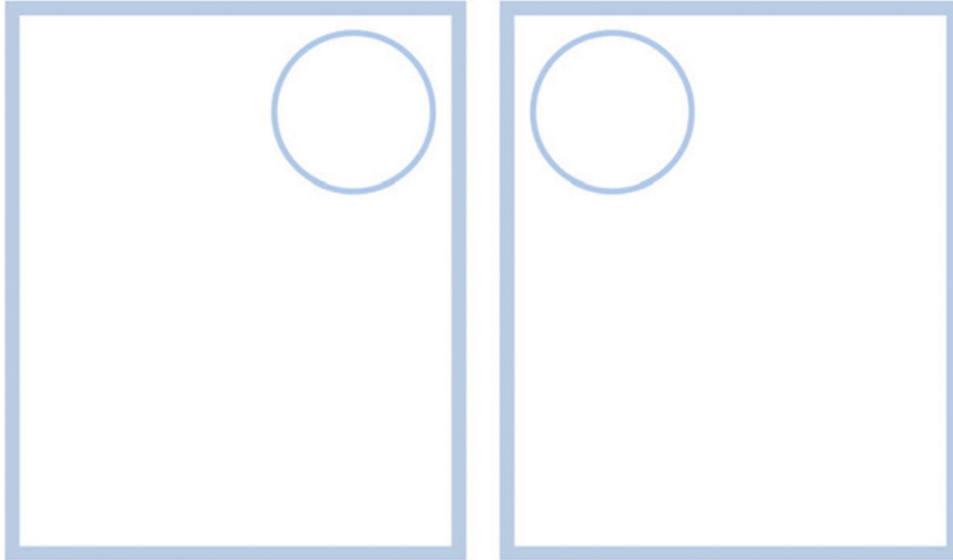
F こしょう価格が暴落。さらに単一栽培(モノカルチャー)だったこしょう畑のほとんどが、フザリウム菌というカビの一種にやられ、破産する農家もでてきた。

G 多種類の作物を少量生産するようになると運搬に困る。そこで、収穫したものをすぐに加工できる冷凍ジュース加工工場をつくり、都市部だけでなく日本をはじめ海外へ輸出できるようにした。

H こしょうモノカルチャーの弊害を克服するために、トロピカルフルーツ類(クプアス、パッションフルーツ、グァバ、アセロラなど)やアサイ(ヤシ科)やカカオなど、複数の作物を育てるようにする。(アグロフォレストリー)

展開計画 「アマゾンの森を持続可能にするカルタ
4 ~日系ブラジル人のあゆみとともに~」をつくろう。

作成用カード



カルタ (例)

